

---

# てのひらの天球儀

金本ちはや

---

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

## 注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

### 【小説タイトル】

てのひらの天球儀

### 【Nコード】

N3367N

### 【作者名】

金本ちはや

### 【あらすじ】

300字〜500字程度の詩を収録した詩集。つれづれなるままに綴りゆく言の葉たち。【不定期更新】

## 寒月に咲く

青ざめた月の光が射す夜に  
きみは何を思うのだろう

凍てつくようなさみしい夜に  
きみはぬくもりを求めず  
だれかの肩に寄りかかりもせず  
ただひとり まっすぐに立っている

その後ろ姿は  
凜と美しく  
胸を震わすほどに哀しい

きみはきつと  
差しのべられた手など振り払うのだろう  
生ぬるい馴れ合いなどではなく  
真冬の海に沈むような孤独を選ぶのだろう  
まやかしと知りながらも  
春の陽の下を往くわたしを睨むのだろう

きみは弱い  
けれどもそれを知り 認めているからこそ  
強いのだ

きみは立つ 寒々しく輝く月を見上げ  
まるで咲き誇る 一輪の花のように

# S i l e n t   r a i n

静かに

ただ静かに

音も立てずに

雨が降る

隣に立ったあなたの

窓から差し出した指先に

ビーズのような雨粒が

弾けた

「冷たいね」

なぜか楽しそうに

あなたは呟いて

わたしは　ただそれを

ぼんやりと見つめていた

「雨は好き？」

「ううん」

それなのに

なぜ　そんなにはしゃぐのか

わたしにはわからなかった

「でもね」

あなたは指先を濡らしながら

「雨上がりとか、虹が出るから、好きかもしれない」

笑って答える

その横顔を

やっぱり わたしはぼんやりと見つめていた

静かに

ただ静かに

音も立てずに

雨は降る

けれど この静けさの向こうに

世界が美しく見える 何かがあるのだとしたら

わたしは この静けさを

好きになれるのかもしれない

どうしようもない、なんて

どうしようもない　なんて

言わないでください

もう駄目だ　なんて

勝手にあきらめないでください

わたしの限界を

決めないでください

わたしの可能性を

捨てないでください

わたしの努力を

終わらせないでください

わたしはまだ　前に進みたいのに

その歩みを　あなたの判断で

止めないでください

あなたは　ここまでかもしれないけれど

わたしは　その先へ行くのです

あなたは　投げ出すのかもしれないけれど

わたしは　まだ抱えていたいのです

あなたの限界を

あなたの不可能を

あなたの終わりを

わたしに押しつけないでください

わたしとあなたは

違う人間なのだから

友よ

友よ

肩を並べ 幼き日々を駆けた人よ

あなたは今 どこにいるのだろうか

道を分けたあの日と同じ 花開くときを待つ季節がめぐろうとしている

時を重ね 夢見る蛹のままではいらなくなったけれど

あなたは いつか思いを馳せた空に 鮮やかな翅を羽ばたかせているのだろうか

あなたはきつとしなやかに 上手に飛ぶのだろう

おそれを抱き それでも必死に翅を動かして

風に乗って 高く高く 遥かな陽の許まで

友よ

涙を分かち合い 笑い合った人よ

わたしは祈ろう

あなたの翅の行く先にある幸せを

あなたの知る空の美しさを

祈り続けよう

どうか あなたを運ぶ風が 優しいものであるように

## 黄昏

空が燃えています

赤く 赤く

瞳の底まで焼き尽くすように

静かに 鮮やかに

空が燃えています

この窓から あなたとふたり

何度沈みゆく夕陽を見つめたでしょう

その美しさを惜しむように

黄金色の光が消えてしまうまで ずっと佇んでいましたね

口を開くことさえためらわれる沈黙のなか

けれど わたしは満たされていました

世界の終焉をあなたとふたりきりで迎えているようで

とても幸せでした

空が燃えています

赤く 赤く

瞳の底まで焼き尽くすように

静かに 鮮やかに

空が燃えています

あなたと並んでこの窓から見る最後の夕陽

もう二度と くり返すことはないとわかってるからこそ

こんなにもまぶしいのでしょうか

いつもと同じ沈黙を

わたしははじめて息苦しく感じています

あなたとともに迎えるものは世界の終焉ではなく 続いていく世



界であつてほしかったのです

わたしが惜しむべきは夕陽の美しさではなく あなたともにある  
時間だったのです

空が燃えています

赤く 赤く

瞳の底まで焼き尽くすように

静かに 鮮やかに

空が燃えています

この黄昏があなたの心に刻みついてしまえばいいと 願いました  
永遠の烙印のように

## 渴望。

欲しかったものがあります

それは強さであつたり

それは美しさであつたり

それは賢さであつたり

それは恋人であつたり

それは友達であつたり

それはお金であつたり

それは時間であつたり

それは才能であつたりしました

欲しかったものがあります

欲しくて欲しくて しょうがなかったものがあります

けれど 本当に欲しかったのは

つけ焼き刃の強さではなく

作りものの美しさでもなく

努力の伴わない賢さでもなく

真似事の恋人でもなく

うわべだけの友達でもなく

貰うだけのお金でもなく

怠惰の生む時間でもなく

他人の才能でもありませんでした

それは揺るぎない 世界でただひとりの『わたし』でした

くちなしの花（前書き）

亡き祖母に。

## くちなしの花

どうしてでしょう

わかつていたはずなのに  
いつか この日が来ると

あなたにさよならを言わなければならないときが来ると  
わかつていたはずなのに  
言葉が出ないのです

あなたに告げるべき言葉が  
出てこないのです

溢れる想いを口にすることが こんなにも難しいなんて  
たったひと言告げることが こんなにもおそろしいなんて

それでも わたしは言わなければなりません  
去りゆくあなたを 見送らなければなりません  
あなたとの日々を 終わらせなければなりません  
これからも わたしがわたしであるために

今のわたしは わがままな子どもなのでしょう  
先延ばしに過ぎないけれど  
あなたの記憶を 思い出に変えるには早すぎて  
手を伸ばせばそこにいるようで

砂のようにこぼれ落ちていく面影を まだ留めておきたいのです  
どうか あともう少しだけ  
わたしを くちなしの花でいさせてください

## ピーター・パンにさよならを

大人になりたくないと思ったことも

大人になりたいと思ったこともありました

日々は変わることなく　いつまでも続いてゆくと思っていたあの頃  
永遠の子ども時代は夢物語ではなく　ごく当たり前のことでした  
小さな小さなわたしの掌の中には  
大きな大きな世界のすべてがあつたのです

とめどなくこぼれ落ちる砂のように時が流れ  
はじまりには終わりがあることを

わたしが世界のなかにいることを知りました  
もう背伸びをする必要はなく

わたしの目は　しっかりと道の先を見据えることができます  
そこに向かって　この足で歩いてゆくために

大人になりたくないと思ったことも

大人になりたいと願ったこともありました

記憶のかけらはきらきらと輝きながら　いつか思い出となるでし  
よう

わたしが歩き続けてゆく限り

さよなら　わたしの永遠の子ども時代

さよなら　わたしのピーター・パン

## PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連「横書き」という考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能<sup>たんのう</sup>してください。

---

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。  
<http://ncode.syosetu.com/n3367n/>

---

てのひらの天球儀

2010年10月8日14時24分発行